湖月抄

ゆふかほ

6

Freer Gallery of Art
Washington, D. C.

822
.M8 K5

桐壺

此巻の名をまうけられ此巻に御局ハ桐壺なりといふ顕然を
あげて名付られたる也されど光源氏の君乃母更衣の御局也　奥入云一名を
壺前栽とも申よしこれ人のつほせんさいのはなさかりとあるによりて也
此巻の中に源氏の君誕生より十二歳のとしまでの事見えたり此巻の事は
桐壺に始まるよりなり給ひてのちのことあれは其後に十三四の年の事こ
とりて次の帚木の巻八十六歳と見えたり　此巻にハ桐壺の更衣
を帝の寵愛浅からぬよしを書て此段専一にかかれるはたの天理
をそむかせ給ふをかくかゝれり此帝ハ延喜聖代に比しける故に好
色のあまり人のそしりを憚りたまはで道理をもかへりみ給はで
天の下にもそのやうに尊ならぬ事をあいして上一人より下々まで是れ
あまねくおもてにあらはれて平生深くつつしむへきことゝいましめ給へる
きなるべし

いつれの御時にか　師　是光君
の母桐壺更衣の時めき給ふ事
をまづ書出せり　此発端の
詞ハ伊勢の家集にいつれの御
時にか大みやすん所ときこえし
御局に大和に親ある人さふら
ひけりとかあり
此伊勢の家集ハ宇多の
帝の御時七条の后にいせの
御つかへせしことを書出す此物語
ハ桐壺の帝をまづ醍醐
く延喜に比しられたるといへ
ど実ハ此物語ハ其時代
といはずとやかくにおぼろ
かにかゝる様に書出せる
ものなりと伊勢の家集の詞を
とりいでたるまでとある奇妙
なるべし　箋云　伊勢集
ハその身のいやしきをとりて
紫式部ハ時代をとらへて桐
壺して其心各別也是作
者の秘骨也たとへハ風の詩
に漢王の事を以て唐を

いづれの御時にか女御更衣あまたさぶらひ給
ひけるなかにいとやむごとなききはにはあらぬが。
すぐれてときめき給ふありけり
はじめより我はと思ひあがり給へる
御かたがためざましき物におとしめそねみ
給ふ　おなじほどそれより下らうの更衣たち
はましてやすからず
あさゆふの宮づかへにつけても人の心を
のみうごかしうらみをおふつもりにや
ありけんいとあつしくなりゆき物心ぼそげに里がち
なるをいよいよあかずあはれなるものにおもほ
して人のそしりをもえはゞからせ給はず
世のためしにもなりぬべき

（傍注）
女御　先きはめて上臈の品を以て立后事とも云
桐壺更衣之
桐壺更衣也
弘徽殿の女御なとなり
桐壺更衣と同し位之
下臈の更衣　嫉妬の心
更衣之　細　更例なり
里住がち
市門の賤人

そいつれの御時にか　河　延喜の御時といはんとてかくかけるなり　河原院を何の院と云ふ類
を小山の白院にあらず云よ同し　此の字をかんと読へし日本紀に尾緒とかきて
女御　花　后よつぐ女官也　師　周礼天官ニ云女御ハ掌御叙御于王之燕寝ニ云
註ニ女御ハ則八十一御妻也　御ハ猶進也侍也　嘩花ニ女御ハ無位以上三位三位なり日本紀ニ
雄略天皇七年ニ稚媛（吉備上道臣女）為ニ女御ニ是始也　日本紀称名院の御説女御の数日本にハかくる
ハ文徳天皇よりとぞ
更衣　花　女御よりハ次の人也此号ハ天子の御衣をめしかふる故更衣といふ也漢書灌夫傳の顔
師古註ニ更ハ改也凡久坐皆起更衣といへり衛皇后傳にも帝起更衣子夫侍尚衣とあり
本朝の更衣ハ仁明天皇承和三年正五位上紀朝臣乙魚授従四位下為更衣是始也　河に委し
細　流云便宜の御殿に候つらいかほどハおもき上達部のむすめ也
あまた候ひ給ひ　抄云　延喜御代后宮　女御五人更衣十九人中宮以下都合廿七人也　河に委し
桐壺帝ノ后宮實名顕之分　女御　三人　承香殿 四宮母　麗景殿 花散里姉 一人　八宮母　更衣二人
桐壺　後涼殿　后二人　大后　弘徽殿　女院　藤壺　此物語に出る所　二七人なり
やむごとなききはにはあらぬが　桐壺更衣ハ大納言の女なれど大臣の女などのやうにはなきゆへ上臈
のお際まてハあらぬゆへやんごとなきにはあらずと也
すぐれて時めき給ふ　細　時を得たる心時宜にあへるとぞ　師　桐壺更衣のときめきて
はじめより我はと　花　此段ハ女御更衣の中に三品種姓をわかてり我はといふ事は
八人よりハ我こそとおもひあがりたる人也此はじめよりハといふハ桐壺更衣の事
などの種姓ざかりよりそれより下らうの更衣ハ地下四位の子乃女など也
めざましき　抄云　会服なりといふ心也はらたたしく世俗に目にあまるといふ心なり
ものにおとしめ　抄云　上中下の姓を褒貶しさだむ上臈ハ御えいやどもあるへし
やすからず　勝の桐つぼを下臈の姓とぞいふなり
まじらひ　孟　更衣遠例かなしよれハ母君の里へ出給ふ事也

めざましき者　孟　正辞よむへし
ねたみ　長恨歌傳ニ京師長
吏為ニ是側目ヲ　河海にあり　細　殿
りなうしたまふ　ものうらみ
の紂ガ妲己を寵し　周の幽王
褒姒を寵せしより世のみだれ
まうすことはおほやけにもいふへし
あぢきなう　抄云　無為　史記
是ハせんかたなきこと也　無道
日本紀　此段無道の心得
ぬ事也　世の人
もてなやみぐさ　世の人のもてあつかひて王
うたてさ　ものの種とて
楊貴妃のためし　細　此巻ハ長
恨歌をもって書也　玄宗の
寵愛ゆへに安禄山が乱お
こりたる事をしるへし
ひきいでつべく　細　此更衣よりの人
のんびけし　師よりて書よ
つよくあるへく
父の大納言　桐壺更衣の父
按察大納言といひしなり
巳におさせ給ひし

上達部上人なども　公卿とい
あいなく目をそばめつつ　細　人のそねみもきらふも同心也
いとまばゆき人の御おぼえなり　孟　起と驕
もろこしにも　細　心を得べし
かかる事のおこりにこそ　細同
世もみだれあしかりけれと
やうやうあめのしたにも
あぢきなう　人のもてなやみぐさになりて
楊貴妃のためしも　種
ひきいでつべくなりゆくに
いとはしたなきこと多かれど
かたじけなき御心ばへのたぐひなきを　細　帝の御心ざし
たのみにてまじらひ給ふ
父の大納言はなくなりて　孟
母北の方なむいにしへの人の
よしあるにて　親うち具し
さしあたりて世のおぼえ　河　白氏文集
はなやかなる御かたがたにも
いたうおとらず

細 已下父衣の俗姓をいふ也 母やうらも(?)あるまりて世のおぼえ(?) ある(?)孟(?)女御更衣(?)といふ也 [illegible] 河 [illegible] 女御更衣(?)にもおとらぬ也

細 孤独の身なれども [illegible] 同

儀式

ぎしきをももてなし給ひけれど、とりたて

てはかばかしきうしろみしなければ、

ことある時は、なほよりどころなく心ぼそげなり。

さきの世にも御契りやふかゝりけん、世に

なくきよらなる玉のをのこみこさへ

むまれ給ひぬ。いつしかと心もとながらせ

給ひて、いそぎまゐらせて御覧ずるに、めづら

かなるちごの御かたちなり。一のみこは、右大臣の

女御の御はらにて、よせおもく、うたがひ

なきまうけのきみと世にもてかしづきゝこゆれど、

源氏の君誕生之 / 清のきよらなる(?)也 / 源氏の君を御門の御孫(?)[illegible] / 細 朱雀院之 師 源の御兄也 / 河 寄重 儲君 師 太子 [illegible]

細 弘徽殿の女なり 師 女御なり(?) 東宮 [illegible]

花 礼記に [illegible] 一馨明徳惟馨 [illegible]

花 長恨歌に春宵苦短日高起 [illegible]

この御にほひにはならび給ふべくもあらざりけれ

ば、おほかたのやんごとなき御思ひにて、この

君をば、わたくしものにおぼほしかしづき

給ふことかぎりなし。はじめよりおしなべての

うへみやづかへし給ふべききはにはあらざ

りき。おぼえいとやんごとなく、上すめかしけれど、

わりなくまつはさせ給ふあまりに、さるべき

御あそびのをり〳〵、何ごとにもゆゑある

事のふし〴〵には、まづまうのぼらせ

給ふ。ある時にはおほとのごもりすぐして、

源氏之 / 細 一の皇子 [illegible] / 寵愛 / イ 母君 / 上﨟 / 無別 日本紀 無破 / 寝 冬進 日本紀

やゝてさふらはせ給ひなとあなかちにおまへさらすもてなさせ給ひし程におのつからかろきかたにもみえしをこのみこむまれ給ひてのちハいと心ことにおもほしおきてたれハ坊にもようせすハこのみこのゐ給ふへきなめりと一のみこの女御ハおほしうたかへり人よりさきにまいり給ひてやむことなき御おもひなへてならすみこたちなともおハしませハこの御かたの御いさめをのみそなをわつらはしう心くるしう思ひきこえさせ給ひけるかしこき御かけをハたのみきこえなからおとしめきすをもとめ給ふ人はおほくわか身ハかよはくものはかなきありさまにてなかなかなる物思ひをそし給ふ御つほねハきりつほなりあまたの御かたかたをすきさせ給ひてひまなき御前わたりに人の御心をつくし給ふもけにことわりとみえたりまうのほり給ふにもあまりうちしきるおりおりハうちはしわたとのこゝかしこのみちにあやしきわさをしつゝ御をくりむかへの人のきぬのすそたへかたくまさなきことゝもありまたある時にハえさらぬめたうのとをさしこめこなたかなた心をあはせてはしたなめわつらはせ給ふ時もおほかり事にふれてかすしらすくるしき事のみまされ

坊かね　孟東宮坊　職員令
坊とハまうけのきみなり
この宮のおほんまへなり
弘徽殿女御ハ餘の女御よりさきに入内ありて朱雀院一品宮前斎宮なとの御母なれハ帝の御おもひやことなるへしとなり
弘徽殿よりの文衣への嫉妬を帝もむつかしく思召　文衣源氏
日本紀　恐惶　同　賊　左傳　可畏
河　瑕悪則洗

疵求其瘢痕　家語　吹毛ヲ求疵ヲ　漢書
細相蓋ハ淑景殿の事
景殿　宣耀殿　桑　弘徽殿

ひまなき御前わたりに 細 更衣の局へ帝乃おはしまして御方々の前をとほらせ給ふ

うちはし 細 馬道に板をわたしてかけはづすやうにしたる也 解 内階

わたどの 孟 廊也 花 村上天皇の御時宣耀殿の女御 芳子小一条ノ左大臣師尹女 藤壺にさふらひ給ふを中

宮 安子九条右大臣師輔女 弘徽殿の上の御局よりかいまみつゝ又不快の事もありけり世

継にあり彼例をいふ歟 あやしきわざをしつゝ きたなき物をまきちらして更衣をおくりむかへの女房のきぬのすそ

をよごさせしなるべし 花 きぬのすそにつくをいふ

後涼殿 花 清涼殿の西にあるなり

ことのみまされば いといたうおもひわびたるを

いとゞあはれと御覧じて後涼殿にもとよ

りさぶらひ給ふ更衣のざうしをほかにうつ

させ給ひてうへつぼねにたまはす そのうらみ

ましてやらんかたなし このみこみつにな

り給ふとし御はかまぎのこと一の宮のたて

まつりしにおとらず くらづかさをさめどのゝ

ものをつくしていみじうせさせ給ふ

ハ上局なるべく

そのうらみましてやらんかたなし 更衣は桐壺を出ても余の更衣よりうらみまさるなり

このみこみつになり給ふ 細 三歳御袴の例 河海に見えたり 河 皇子三歳にして

袴着の例はあまたあれどもしるさず

御袴着の例 冷泉院 東宮ノ時 円融院 親王ノ時 花山院 東宮ノ時 一条院 親王ノ時

一のみやのたてまつりしに 弘徽殿腹の一宮也 後に朱雀院と申 一の宮其外源氏よりさきにおはしまさず

くらづかさ 内蔵寮 クラツカサ 金銀珠玉宝器錦綾御服別勅の用物等の事をつかさどる

職員令にあり 納殿 後涼殿にあり諸国よりの進物などをかさねをかるゝ所なり

それにつけても世のそしりのみおほかれどこの

みこのおよすけもておはする御かたちこゝろばへあり

がたくめづらしきまでみえ給ふをえそねみあへ

給はず ものゝ心しり給ふ人はかゝる人も世にいで

おはするものなりけりとあさましきまで目を

おどろかし給ふ そのとしの夏みやすどころはかなき

心ちにわづらひてまかでなんとし給ふを

ものゝ心 源氏三歳の時なり

諸書に袖の事なり

みやすどころ 細 御子をうみたる女御更衣を御息所と号す

まかでなんとし給ふを 退出 里に退出せんとするなり

とくしとおもひの為もいやと
あやしくなり ゆるさぬあり
文例のやうなりとぞいひ
まだかん まへしく
かきつらねたるを
かれ我中将にかく書紀はえし
ものゝくのことを細うりて
座にの職をかせとも御ゆる
しなきさんくまゝり
又六月 細に河うむゆうと日か
のまをとりいれて後く以下繁え
ますゝてませすろ事ふ
細ら事て退おのやうまでて
されども御いて母をとりもい
うりし奥ふてまうりまくれ
われおふまうしてませまうか
いとい 私まこしの退おくし
いそは法わかくこ不よあり
うちわすもおかれしき私も
しもしく わすこの名むしかわ
まへつく 細 文衣の里ま流し
たまふへくりすど事年無ー
して源氏の君をとしめます
くめおこれる心あらへし右宮

歯ぎしりしてゆるさせたまはで [illegible]
め例しさまをかりきこえれはめかれて [illegible]
しらうみうしのをとつうきうらん目もくれぬ [illegible]
りうまてぞちで大去同の [illegible]
ぜばかくぐみかくしてうかゞくずうてませ [illegible]
しそせうちあおうらかうをあうましれ [illegible]
そうらをそとしとうつはりひとつてみとよは [illegible]
とぐめうそりうてあててせあまありうりかれ [illegible]
いさあても又とくめさせまうりし御縁 [illegible]
とくしぬ [illegible] つれさといへうれしく [illegible]
いとわかひやうまうかしきを人のいうそう [illegible]
ゆりやとそりてしめされしも [illegible]

わすらく里亭へおまうて
らくしれさせもゐをもる
ひきおとろいて源の君とさえ
中にとめまいて
ことまおてまかくれ
孟は酒博よ数ぐをく餘情
をおはり [illegible]
いそゆしさ山川の [illegible]
とせうぞそ [illegible]
あり
きし [illegible]
[illegible] 世俗 [illegible] 河 盧 史記
[illegible]
いとくきみやく [illegible] 文衣の
術のやうりうまさとくとゝおに
らる人なるへし
われのあさしんかそて 細
せきらの [illegible]
うきうかやくまよりさんかて
重き神の孟 秘 [illegible]
てうる衣のせんし 禾記 興を輪
とりけてゐりてひく車を
とうて内裏の内の内へ [illegible]

[illegible] りこよめのかくしも [illegible]
きしいう [illegible] おのしぬとけうへ [illegible]
り来ぬけり [illegible]
ちざうの [illegible]
あうれ [illegible]
ならくとわれの事 [illegible]
さ歯かれしと [illegible]
しかどのまかせてもえつくをまて [illegible]
ゆうとせまうでぶうぶうわうんみちみ [illegible]
さ紀ぶくじとちぶっしっせのあけのそうさう [illegible]
うちもてくいうへゆきさやうしとの [illegible]
そいとぬうちちとうそまうりく

なからり更衣重病なれハ輦車ゆるりて退出あるへきよしを仰せらるゝ宣旨なり 河 仁明天皇女
御藤沢子依病退出之時被聽輦車卒之後被贈三位 てうの後ハ后宮のるところの
なか中の重の車をせ入のよめく中重の輦車をもゆるく 細 花鳥の義にかハりて花鳥 後涼殿
つまセ給ふとき上局より給ひもとしてさふらふ人更衣の曹司とかはり
此物語のくつよおもひなすへり 延喜式 夫人及内親王ハ後涼殿の陣とゝらふ
殿後涼殿後 延喜式曰凡乗輦車出入内裏者ハ妃限曹司夫人及内親王限温明

みつせ給ふてハさてにゆうらせあられ
かくありしてらうてとめの
孟かゝりかうんなふもとく
迷ひ給ひしと契らせ給ふ
とまりとも打付てハ給ひ
しこの御つほね文衣の
つらしくありて更に
まて其かりめて頼なかよ
給ふ君のよろよいう伺ひ
うらく只今の御そなから
あてハ感情わかく御く死
なる帝の御せ給ふるに
てゆかしそゆかしれ連
かく給へる事よき事とさ
いとゝいふ事の是よりハ
呼 此詞も感あり甚て更に
おしやりのんのかよ猶給ふ

更衣の意、帝へつかせのひて御覧しては別かてとかく 細 生と死と

文衣 かきりとてわかるゝ道のかなしきにいかま
ほしきハ命なりけり いとかくおもひ給へ
ましかハといきもたえつゝきこえまほしげなる事 （息も絶へし）（御門へ申度事あれとも）
ハありげなれど いとくるしげにたゆげなれ （更衣の気いひやうも若しくあるげなる）
バかくながらともかくもならんを御らんじ （御門心をもち禁中にて更衣の生死を見果んとおもひ給ふ）
はてんとおほしめすに けふはじむべき祈とも
さるべき人々うけ給はれる こよひより （験者ともの）（修法加持之）
ときこえいそがせバわりなくおもほし

ながらまかでさせ給ふ 御むねつとふた
がりて つゆまどろまれず あかしかねさせ給ふ
御つかひのゆきかふ程もなきに猶いぶせさを （河 更衣退出之）
かぎりなくの給はせつるを 夜半うちすぐる
程になん たえはて給ひぬるとてなきさわげ （更衣逝去之と里の人々鳴さわくに） 河 最無敢
バ 御つかひもいとあへなくてかへりまゐり
ぬ きこしめす御心まどひ 何事もおぼしめしわ
かれず こもりおはします （御悲歎のさまなり）
はかくても御らんぜまほしけれど （君ハをさなく禁中にまします）
みこはかくても御らんぜまほしけれど

細 今夜より更衣の里ゆて修法をとかさき人をとすり
別かうく云なうくへ曾者定離の理とおもひかけ

久まくし申くの君きの更に
さうしやもとあらてく
今まうひへさいのつとも
わうるく御事わかれなう
御使のゆきかふ程も果さん
更衣の里へ御使の往の
ゆて久るやともるきみを
御なうりくうすく宮は泣ぬ
まてはそのあひゆう
有為轉変のうらゝひを志
めもしなる人し
こゝとりみやもしまず
御秋の政務るまてにこも
里ゆつる様なし
細 七歳よりの人服忌あるか
醍醐の御代よ法どとそち
うく事あ夜殿より是ハ
始めて七歳已上の人も服
のつとあるへしと定て此
の御よりかく 喪 死さるま

一秘訣あり

よろしき事にだに　河　よろしき事とハさまでもなき事をといふ也　中品の事をいふ也　細　事をさへ別れハかなしきにましてこれハ細ましてのこと也　更衣の遠例して退出の時も限りあれハさらにとゞめさせ給はず又更衣も念ぜさせ給ふ事もあれハ例の作法にをさめたてまつるといふ也

例の作法　細　今の六道などの事也　昔の葬所なり　河　桓武天皇平安城に遷都の時山地と定め人の葬所に定めらる　延暦遷都記にみえたり　細　母君

むなしき御から　師　更衣の死骸と見ながらも

まかで給ひなんとす。なにごとかあらんともおぼしたらず、さぶらふ人々のなきまどひ、うへも御なみだのひまなくながれおはしますを、あやしと見たてまつり給へるを、よろしき事にだにかゝるわかれのかなしからぬはなきわざなるを、ましてあはれにいふかひなし。かぎりあれば、れいのさほうにおさめたてまつるを、はゝきたのかた、おなじけぶりにのぼりなんとなきこがれ給ひて、御をくりの女房の車にしたひのり給ひて、おたぎといふ所に、いといかめしうそのさほうしたるに、おはしつきたる心ち、いかばかりかはありけん。むなしき

御からを見る〳〵、猶おはする物と思ふが、いとかひなければ、はいになり給はんを見たてまつりて、今はなき人と、ひたぶるにおもひなりなんと、さかしうの給ひつれど、車よりもおちぬべうまろび給へば、さは思ひつかしと、人々もてわづらひきこゆ。内より御つかひあり。三位のくらゐをくり給ふよし、勅使きて、その宣命よむなん、かなしき事なりける。女御とだにいはせずなりぬるが、あかずくちおしうおぼさるれば、いまひときざみのくらゐをだにと、をくらせ給ふなりけり。これにつけてもにくみ給ふ人々おほかり。

猶おはする　河　母君の心　ひとへにおもひなりなんとて思ひきりて灰になり給はんを見て今はなき人とおもひなりなんと也　賢のやうにいへども心まどひのやまれぬ事をいふ也

三位のくらゐ　細　例のごとく　孟贈官位の例　河　清和外祖母葬山城國愛宕郡

三位ヲ

宣命　大臣勅を奉りて作る也　内記これを作る　延喜式にあり　贈位の時ハ宣命也　女御更衣の事をいふ也

女御とだに　河　女御の例なし　女御ハ三位也　更衣ハ四位也　猶更衣よりもすゝめて女御になしたきとおもひ給ふ事也

[illegible]

ちりまふはさまかたちなどのめでたかりし
こと心ばせのなだらかにめやすくにくみ
がたかりしことなどいまぞおぼしいづるさま
あしき御もてなしゆへこそすげなうそね
みたまひしか人がらのあはれになさけありし
御心をうへの女房なども恋しのびあへりな
くてぞとはかかるおりにやとみえたりはか
なく日比もすぎて後のわざなどにもこま
かにとぶらはせ給ふほどふるまゝにせんかた
なうかなしうおぼさるゝに御かた〴〵の
御とのゐなどもたえてし給はずたゞ涙にひ
ちてあかしくらさせ給へばみたて

[illegible]

まつる人さへ露けき秋なりなきあと
まで人のむねあくまじかりける人の御お
ぼえかなとぞ弘徽殿などにはなほゆるし
なうのたまひける一の宮をみたてまつらせ
給ふにもわかみやの御こひしさのみおもほし
いでつゝしたしき女房御めのとなどをつかは
しつゝありさまをきこしめす野わきたち
てにはかにはださむき夕暮のほどつねよりも
おぼしいづることおほくてゆげひの命婦と
いふをつかはす夕月夜のおかしきほどに
いだしたてさせ給ひてやがてながめおはし

直衣なりの侍を工用也　暁月
ゆげいの命婦　花　靭負とかきてゆげいとよめり靭ハ矢を入るものとぞいにしへ衛門ハ靭を帯ける
つかさなりけるゆへにゆげいといへり此命婦ハ今の世に内侍のお職掛を兼せぬ中臈を着ハ命
婦と号せり殿上人以下の娘なり　細　ゆげいの命婦ハ衛門の命婦也　拾遺の細書にあるなり
命婦ハ極〆して八典侍中にあるを内命婦と云ふ私の妻とも命婦といふそれを命婦と云ふ
尚侍も典侍中に内の女房の中にも内侍の職下にてさぶらふ婦を中に命婦女房とてある也
れあそびなどをさせ
更衣も世のおぼえにほこりし
もしてくし此後ハ管絃なとく　奥入ニひろ
やさしかりけりハ
のやうの事ハなどかふとおもふ
いづくらもおもふそのことの
細　更衣によりてらもほまことき
まさらとさとえさらくりハ此
此はあゆぶあゆ命婦も御やらを
の更ゐ奏の妃ぞの娘ハ教わさ
ならかるさハとをるゆきるす
などらけ此偲がるハそれ
れぐるかれハし
やまわすこなれと
命婦ハ更衣の母君の家来
のすをやとし

かうやうの折りハ御あそびなどをさせ
心ことなる物の音をかきならし
はかなくきこえ出る言の葉も人よりハことに　哥人
なりしけはひかたちのおもかげにつとそひ　形貌ハ更衣のかたちさし
ておぼさるゝ闇のうつゝにハなほおとり
けり命婦かしこにまでつきてかど引　更衣の里へ之
いるゝよりけはひあはれなりやもめすみ　お命婦の車へ
なれど人ひとりの御かしづきにとかくつくろひ　お母君更衣の事之　更衣ハ母とひとりむすめなれば
たてゝめやすき程にてすぐし給ひつる　更衣存生の内

やみにくれて　更衣を出し
ことのかたのやうに書ましひ
て母君のうちこもりておはし
給ふによりく　蓋とがさつ
くらくてまし草の生ひしげり
あれたるやうにちらされ
お沢量あれたるによりおりこ
うらもと葉もおもへりや
ひろしのあれたるやうにし　奥入ニ彩袖
月かげ
人もおらさ者なれとくなき
去ハやへむぐらにもさはらでさ
しい入る　更之　細　春を月に
みて引用　暁日
母君ハまうとゝよ　幾よ　故元母君
うしろの詞こそしぶひり
もなど　詞もなかりして
わう　ささ給し　伝袖書
に思つまとかゝりにそそのる
とてとあり
いまゝで　お母君詞くく
なんぢひてとひ生かゝ詞之
らりさるの者に入まふ
拾遺以外そにハ君をたうらん

やみにくれてふしゝづみ給へる程に
くさもたかくなり野わきにいとゞあれたる　のわき
こゝちして月かげばかりぞやへむぐらに
もさはらずさし入たるみなみおもてにおろし　令婦を車よりおろして母君の対面せられし
てはゝぎみもとみにえものも
のたまはずいまゝでとまり侍るがいと　生ときまりし
うきをかゝる御つかひのよもぎふの露
わけいり給ふにつけてもいとはづかしう
なむとてげにえたふまじくないたまふ　令婦初之
まいりてハいとゞ心ぐるしう心ぎもゝ
つくるやうになんと典侍の
そうしたまひしをもの　帝へ奏し申上られし
おもふたまへしらぬ心ちにもげにこそいとしのび

まことさふの人もつよいぬ秘やうのこころ
けはえふまし／く
侍らういとうきしかる伯とうけくいふし
まうりてハいとぶんらまう
しにられへまつりこそハいとくうきらの
肉弱のまけの
ぬちひまへまうぬなら
やくすゝひて 捲行 集十三
闇とちりしをさんへてわく
おば此役の令嬢の折ふあり
ことあよ云ありせうりとへし
あちりしハゆめうし 細
勅云と令嬢の侍りうし
お帝の出口とうかわし
さむへきうれく そひさ
まれんうちうれく 夢
ものことあるし 首尾
こひあくは次つき お 自余
の女御更衣達ハ相更衣をそ
ねとまう人へちうられハ語
会すらん人たきし
もうく志らう 盃 あろく
ともとりふ義も お 其より
令嬢の御し

細 母君の為にこそハかやうの仏事ひよわ何ろうるす八秘すき
ぐさよいのちも堪うるまじく鳴ゑるふうくしかま今まそて
耐臣 母君の悲傷をおひやられてとしいうりふもふうまら
細 衆よう丙きま典侍とれ役よは参るくするへし
盃 令嬢の秋ふ別もえきとりまうく お 令嬢の早下れ何之
想の遠く事にさへ
うう侍られとそやさあらひて物がせっと
沐 靭河 良久おふれ
つくえみ也志ぶしハゆめうしたえうとたくられ
しと座らくせいひ志かりまうおしとさむ両
きうさなくしんがうさはいつつもへさわざ
ようともひおくもへきへかうるたかさと志
母君は参内あれとく
のびてハまつりまかへんやわりなめのいとれ
源氏之
朝つるすゝ露けさなするもそて結もいぶう
しうぬほさらしとどくまうりまへかゞしく

むせかへりせまそて 闇まひそく
むせひ給ふこ
こ御ハ人もくうりて 帝の法
らさ令嬢の推はりて土廻
うけあまりもいそぬ お おぼう
まあまりおをやうやてまり
さんと 給ふく
れ文そそまつり お 文衣の母
への勅云と令嬢のつぶ
あかり
ひらうふそうん
勅定を未ふく身うとの
こころなり
お人ハもうし お 月日此う
つらふせめてそひの紛やま
らんと月日のありをまて
べかよく母びらくなかせ
こころも沈そうてまね お 相更
衣とれうらんよそうてまぬを
之 御 更衣くれ之て帝
ひらうかまとを物おりつうなく
物おしめきてとくし

ばうちこもの海るせやうんじむもをうくら
せまつはハ人をなよはくみくそてまうあ
らんと物ほしつくまぬまじもをあうぬ比者
し我のくぶりしこうようけ海ひりきたえ
てぬやうかめてなれハまでで侍りぬうとそて比
勅書之 細 文衣母御見
文らそてまつりめとみし侍るぬようくうしこ
こころ之
こ是物ほせてしとひらうめてなんいなそことを
細 衆より勅書の仕初く
かぐへいずうしうらやとをま
りもくの月日よそへていとよのびうまれこ
源氏のくまく
わりなきまうるよなかんいうげちるさ今もい
お
きよとをひやりつゞりんしなもつかまくつまね
物ぼつうすず我ハまはすなをもりし物とさことよ

宮城野の　細 宮中の心也　花
又ハ しらん 花 露ふきむすむ
とふハ涙をいふ小萩ハ若宮也
といふ文の心なるべし
いのちながさの　河 荘子曰寿則多辱
松の思はんことだに
細 いかにして今迄ありとしらん 高砂の松も昔の友ならなくに
きのふまでありとしられんたかさごの
松もむかしの友ならなくに
高砂の
あらはしぬ　河 百官の座
とある　ゆく林下中と百家
ももしき 仲人ある也
をしていと
んなるまじくなる命
ながらへてかくまなく侍るをと
なよく人にはましてともく
もとしらぬ
かしこき仰ごとを はれ給ひし也 くらし

ものしたまへなど、こまやかにかゝせ給へり
せ給へり
河内本
みやぎのゝ露ふきむすぶ風のおとに小
こはぎ
萩がもとをおもひこそやれとあれどえ見給
其母の方の孫を
ひはてずいのちながさのいとつらう思ひ給へ
抄 更衣母詞也
しらるゝに松のおもはんことだにはづかしう
花 松の事也 更衣の字之
おもふ給へ侍ればもゝしきにゆきかひ侍らんこと
抄 前にはれ給ひし事を思ひ出てかく
はましていとはゞかりおほくなんかしこき
抄 源氏へ
仰ごとをたび〳〵うけ給はりながらみづから
源ハまだ三歳なれバ也
はえなんおもひ給へたつまじきわかみやは
いかに思ほししるにかまいり給はん事を
のみなんおぼしいそぐめればことはりに

ゆゝしき身　更衣の母乃
身のうへのつゝしみ也　細 寡ハ
いまはしきこといふ也服ハ
久しからぬ詞也　孟 忌の字也
服あれハつゝしむ也七夕
をうしやまれぬる物なれバ
ありつる人　花
いま〳〵しう　花 更衣
母也若宮のおはしますもいま〳〵し
きと也　世をそむく人也
さへも　細 命婦詞
猶源氏を見まいらせて
おほさまも奏せんとあるを
よけり
かれ宮とく
まいらんとし　奥入 やうに金一
人の親の心はやみにあらねども子を
思ふ道にまどひぬるかな　後撰
つかさきなる　兼輔の次ぎ
あやしさ命婦のことぐに
みゆきまいへとく　ヲモダタシ
おもだゝしき　孟 面立負
のみえる　細 更衣在世の時ハ
おもしろきことに ぞ

かなしう見たてまつり侍るなどうち〳〵に
思ふ給ふるさまを奏し給へゆゝしき身
に侍ればかくおはしますもいま〳〵しう
かたじけなくなんとのたまふ宮はおほとのご
源氏ハ清涼殿に居給ふ也
もりにけり見たてまつりてくはしう
抄 御有様を
御ありさまも奏し侍らまほしきを
帝の待おはしますらんと
まちおはしますらんを夜ふけ侍りぬべしとて
細 更衣母詞也よをたどりくらす心也
いそぐくれまどふ心のやみもたへがたき
かたはしをだにはるくばかりにきこえまほ
しう侍るをわたくしにも心のどかにまかで
命婦よろこび出給ふ
まへとしごろうれしくおもだゝしきついで
文字を荘厳ともいふ
にてたちより給ひし物をかゝる御せうそこ

御消息ありしを云ひ
うけたまはりしその御役と照
しるべ 撥 上の詞に命あり
是よりハ撥
そのいとつらふ 其前に
いそうでまありて候ひしわ
あはれとおもふこれそ
是くつまさきといふ
お味あり
拍子あわりし人
拍子祝ありて文を候へを
入させしとて
河とう 河 類 顛 退し
届の所く
まうくしれ 前よりも在文
衣のすそにまとはそそれ
うらしさのうまで
のちかれなとおの
世くれへきる かま
るのちへ行てハ久う
てのへ有いれるまやあり
へとさし
人けるきことも 人よ命あり
せうりれぬものくつは也

こそそうしてまたう あつくしつれなき命あり
はなれむまれし何とらぬ人のめりし人よ
て我文納云いまりしてもせずしてそこ人の
つ人の身ハうらんれとげきせ よそまられ我
すくわりぬしよくらぬしう あひそげける
わしゆくいつらめとられ候しくやくくまう
くしろそうよ人のきさ海とらひ あかくけゆくと
しく拍子ふしきへ人なかしさ あのゆいとむとさ
く人しとたくろさせよいぐうしそて候しと我よの
まつうそでの御ぶしのよろ所よふう てけるすさ
よく人けるきさいくらじとくしうつあじらひまあめ
あつうほ人のそねくあくつうりうやまそうしな

伊勢物語云名寺にあり
もとより御がらむやうみて
横死也ありけるに家ありし
こなよりハ人の心をみすしは
りとてかせめれハ横死の
やうしてまりうり 河薬師
經ニ九横死あり其中ニ
八者横為毒薬厭禱呪
咀之所中害ト云へり
くしもうなん 命 細田は
いにもさやうはるまん作るそ
とくし 孟らくの作せるすを
はここは御読あるとしるし
そておりしますとの後こ
ぞうまりきぬそり
文衣この長短ありべきゆへよ
人目あるくれしと云しれ
てそとくし
世よいふうもん人の心を
晩聖主の御心つひ隠勝之
所後漢の文衣の曹子
とうつさせまひしするたく
曲しるゑけれし

こうまりくなりうそひ候よこことうも
やうふそくつるまりくなり候めれば
まつこきりてハつこく
てハつくるきんぞしさきれいそうしとそ
へたれ候さられもわりなきさんのやくとまこ
どそひもやめいびもうりの便よ我もぬ
けなうへもしうるん われおとくるがしつかれ
ちよ人めゆくさくそうつ切れしとな
ぐうまじきぬそうしいまハつらうんきう
人のちぎうよまるん世よいそくうも人の心を
まげさうてとくいあくしと拍りかなどぞこの
人ゆへつそておさうつさうかなうつれ人のくとと
とかひしそそくかあうりうちまそてくれ

てん地をあひうさなりてよいとゝ人わたうう

極の家…つかふるりて何ゆもさ死の世ゆりしう

なんとうらやましくつて[illegible]れば…のとて

[illegible]しまれもうくうつきせずと[illegible]

いつうみけぬまばこてひとくさ涙はくり

そうさんといそぶさうつ月ハ入ぐさの雲さよ

うすみうられるよく路いと濡しく嗚て草

村の虫乃こゑぐくめ[illegible]

ちりさうれはなく花葉は[illegible]りしたり

よそ虫のこゑれ[illegible]をぼくしても[illegible]

さ秋あらぞそふ[illegible]たまさぐられ[illegible]

うつゝくやらん

いとゞしく虫の音さへあはれさ[illegible]

ときさへふかき雲のうへ[illegible]

なんといふせまふおりしきれとくり[illegible]

おりべきおりふとあくねばさ[illegible]

しそうらくもやとのこりまつ[illegible]

さうぞくひとくらり涙しくあげの[illegible]

いかくれさへすふわりさんへ[illegible]

さうれも[illegible]わきりを鵜夕[illegible]

てびとさうくさくうへのれあり[illegible]

おりひつぐやゆれべとくまう[illegible]

そびのし叶ひ[illegible]くまく[illegible]

まのつゆにハとられてられしうるへさとこうねハとられて考けさまれりよりてあまうう

のやに雲の上人さへうこりの哀也

おりうらハいとくうき物　愁傷の比されて風流のまうり也と令嬢にまつべきにまあるねへとくし

ぬらくあげのそうどうく物　河むりしハ女御更衣以下辛アに鬟をわくるの年齢之次第の

けの調度どるを盃に入まする之　鈸鈸などく　細 うしぐしなしの就なするとし　肉の女房

さきれの内ぐそめぶなそてうんぶしるなどうして鬟をいつてきんなずなし

くるしきるゆハさくゆも　肉更衣のかすし之、勿論肉わくうりはよともうう　うつきる又二つの

うの垢りひとすや肉ろうりなど八度もゆわうれハ更衣のくすれ出しさても心ひかきされ

んとうすや　寂寞　和名さびしきありえ哀の舌里をさひしくさゆく

はうくさく

さくまつりまうんるいを

一役ぬ光君をさく内へまうらせらへうく　仟 ありまを奥しまつらせて母君よとく哀虎しきへとそのうきて

又こそてすまうて　仟る　そさまんくるんもいとんぐてうるへしまる

気ヽ母のまうひて哀内も人

ばまるうらん又ある更ハうり　なるくまろてき涙しをあるんハいてとくし

哀内わうバんりくなりうん　河 影護 和名心りしりきごやうの紀之

と母君のとらひまふを黄する　わめつうちひゆをしあそてすぐうくともえま

の地よりそう　細 られく速之

まぶ記とのとまらせ　いきせそまうらうろふなからそう令嬢ん

細 占上いまきる寝あるきて

お嬢へし令嬢のゆりまいる　まで奇るのこめうせさまつひりそうなと河

とまらうのふゆへさお人は　山伺そ此君の一名とする

まうおろしまきんとそう　これはさうそてまろうゆもまへのかせんざいの

ぬまへのつくせんさい

蘆荻藂 清涼殿の東庭

前に西庭朝餉并臺盤

所の前にあり　延喜元年

ふてうり　河海にあり

ぬらんまうやうして　令嬢

の旅気をすらぬくしろう

けうへし人目をはゞりあ

ゆさ涙哀あらし

長恨哥の訛絵　玄宗の

別を玄宗の貴妃が歎

きまよおもひめしなそそて

ぬらんまうるるへしあれよ

楊貴妃のかめしをうつそ

つへうとそう首尾で

亭子院　河 亭子院八七条

以南油小路以東一町

仟 延喜帝の濟文宇多

院の御うすん　河 伊勢家

集云長恨哥の屏風

亭子院よりかせあふて

そ所くとよませ給ひ

てしかしはみらく

いと紛りうさきうりかなんとゆくらんむじやう

やの字まんとてへし

やうふうくぜびやうぶ心のく心うまうりれ女

ヨメタリイツタリ

房又人さふ心うそうせおそしれりのがうり

をうせおかうりぜびあけられ汰らんまう

長 恨 哥

らるゝこん　うのは忌亭子院のうせ給

ていせつてゆふさよ。うまうせおへるやうまし

伊勢 詩のうたへまた八日記二八くうこさとぞふり

云のそとよう。わうろうしのゝうとよ。とつてその　青三

明くれのとしらさとつく云せと陽に心なる

とゝれまよれまて　もてらうまでまつくしくれをうさゝ世給へいと　母君也あ

ゆまう海そ帝の令嬢まとり世あらて

こゝやうよをさき海とゝはをめ。そ奇すなりつ

母君のあちゞきい海総統の院手あうらやしろて

あうし悉ひやうまそうすれぬりれうん

細 母君のみの翁く

ぐれバいうしてうしこさハとうかへ所も侍らぬ

秦くあ勅まとを下されき

うゝ給せかをいしくれつあくもくうぞそぬ

紅葉ハのこてまされとて見え入ぬまなそでらる抱ハ物ごとに秋の哀すゝみたり 又王麗なく脂もえて物と是
みもえじとおもひけるにや 花鳥云 長恨哥のゑハ紅葉のゑにもよくれ其の一首ハ帝の尚
まゆゑもしらせたまふらし 伊勢が集よの世の作れバ亭子院の御製にてあるへくさふらふ今一
首の玉簾あくるもしらずとして見るハ伊勢かよみかへし貫之が哥ハいまさら人の
為とて 抄 長恨哥のゑハいせの哥ハ家集ニ十首有 貫之哥ハ花鳥ニもいまさらへ
をとあり定てありしにこそ
のちにハ風にせばうし院のみゆ
細 かの秋のあはれをとりて
花 源氏の君の母更衣より
されまゐりたり とさくへ作り
こぶりもらうしさ
細 此歌ハのすがりたまふさぎ
御もらぶりことゝも
暁日
つとへくりしも なさよ
よいさ惣傷のけしきに
ハ入しじとこひ給ふせ
へぐもとし
時のまもおぼつかなかりし故
暫時おひえなるらん
ふかつゝるかりし
月日へてもあれハあり
まうさ 古哥もと
そは猶あはれバくても

みだりごゝちになん

更衣母

あらき風ふせぎしかげのかれしよりこ

はぎがうへぞしづ心なき.などやうにみだり

がはしきを.心をさめざりけるほどゝごらん

じゆるすべし.いとかうしも.みえじとお

ぼししづむれど.さらにえしのびあへさせ給

はず.御らんじはじめし年月のことさへか

きあつめよろづにおぼしつゞけられて.

時のまもおぼつかなかりしを.かくても月日

はへにけりとあさましうおぼしめさる.

故大納言のゆいごんあやまたず.宮づかへの

ほいふかくものしたりしよろこびは.かひあ

るさまにとこそおもひわたりつれ.いふかひ

なしやとうちのたまはせて.いとあはれに

おぼしやる.かくても.おのづから若宮など

おひいでたまはゞさるべきついでもありなん.

命ながくとこそ思ひねんぜめなどのたまはす.かの

おくり物ごらんぜさす.なき

人のすみかたづねいでたりけんしるしの

かんざしならましかばとおぼすも

いとかひなし

へからせよとこそあらまほしけれと
みかどの仰く 細日
故大納言のゆいごん 細 大納
言の志を母君のおぼえしに
よりて作しあかし 何さ
きに大納言の遺言を母の
うけしまゝに令嬢帝
へ中わけゆりしと宮仕
えやつくへのかひかく
更衣を宮仕よりの本意を
かくぞしられといひせ
くてもそのつかう
細 母君をさくさめ給ふ旧
何なり
さるべきついでも 若宮
を春宮にもとゆかりめ
をもとむなるべし
命ながくとこそ 抄 母君
のいのちながきのいとはせ
らぬなどそのしまゝを令
嬢のやしなひをさへうし
めしくの御詞し
なき人のすみかたづね
よりたん そと長恨哥の

しける元亀云 臨邛の道士幻術をもて蓬莱山にいたり楊貴妃にあひて玄宗の心さ
しをつたへし時楊貴妃そのしるしに金釵鈿合をそへて 此二の
物とそのくはしきおもむき長恨歌にのせたり
まことしかれんずるしるしにかバ 命婦がえせなきしるしなるべし あげの[illegible]もその臨邛道士が
玄宗にまゐらせしごとく更衣よりのかたみなれども
いとかひなし 是ハ母よりのかたみにて楊貴妃が直にまゐらせしとハかはりて更衣の
こせしにあらねばなり

尋ねゆくまぼろし 抄 方士
のごとく幻術士の名也 師幻
術の道士をいふ也 更衣のたま
しひの住所を知らんとなり

太液の芙蓉未央の柳
奥入 長恨哥云 太液芙
蓉未央柳 芙蓉如面柳
如眉 これ貴妃のかほを
蓮にたとへまゆを柳にたと
へたるなり 太液ハ池の名 芙蓉ハはちすの事 未央ハ
宮殿の名也

げにかよひたりしかたちを
此からん絵の楊貴妃の
芙蓉柳にも実に似かよひたりと[illegible]

仙
尋ねゆくまぼろしもがなつてにても魂のあ
りかをそこと知るべく 絵にかける楊貴妃の
かたちハいみじき絵師といへども筆かぎりあり
ければいとにほひすくなし 太液の芙蓉
未央の柳もげにかよひたりしかたちを
からめいたるよそひハうるはしうこそあり
けめなつかしうらうたげなりしをおぼし
いづるに花鳥の色にもねにもよそふべき
かたぞなき 朝夕のことぐさにはねをなら

の唐めいたるよそひハから[illegible]義繁なり 或説 吾朝の風俗ならねバ
さしてなつかしからぬと也 唐めいたるハ此楊貴妃のありさま 更衣ハやまと
なつかしうらうたげ也
かけりしうらうたげなりし
更衣のさま也 細 貴妃ハすぐれて此更衣ハ人物もならびなく
花鳥の色にもねにも 抄 [illegible]
きたなし 河奥入 長恨哥 在天願作比翼鳥在地願為連理枝 抄 或秘
抄云 南方有比翼鳥焉不比不飛 孫子瑞応図云王者徳化洽八方合為一家則草木連理
略記之 天暦御集
此女御 安御芳子 [illegible]

べえだをかはさむとちぎらせ給ひしにかなハ
ざりける命のほどぞつきせずうらめし
き風のおと虫のねにつけてもものゝみかなしうおぼさるゝに
弘徽殿にはひさしう
うへのみつぼねにもまうのぼり給はず
月のおもしろきに夜ふくるまであそびを
ぞし給ふなる いとすさまじうものしと

いとおしたちかど〳〵しき 河 寂押立 日本紀 かど〳〵しくあるべきやうにかどあり 御かた 大臣あまた 時まゐりの後は いと… 或 廃朝 天子 廃朝 三ケ日 …廃朝の時は音楽 弾をやめ禁中に物の音 すべからず 父の喪なども 廃朝など

しめす此ほどの御けしきみたてまつる上
人女房なとはかたはらいたしときゝけり
いとおしたちかど〳〵しき所ものし給ふ御方
にてことにもあらずおぼしけちてもてなし
給ふなるべし月もいりぬ

雲のうへもなみだにくるゝ秋の月いかで
すむらん浅ぢふの宿 おぼしめしやりつゝと
もし火をかゝげつくしておきおはします右
近のつかさのとのゐ申のこゑきこゆるは
うしになりぬるなるべし人めをおぼして
夜のおとゞにいらせ給ひてもまどろませ給ふこと
かたしあしたにおきさせ給ふとてもあくるも

て月もいりぬ 長恨歌 半夜鐘
雲の上もなみだにくるゝ
奥入 夕殿蛍飛思悄然 秋燈挑尽未能眠 長恨歌
右近の司のとのゐ申 右近衛宿申 奥入 亥一刻左近衛夜行 官人 初奏時 丑一刻右近衛宿申
事至卯一刻 内豎奏一刻 宿直
奥入 春宵苦短日高起 従是君王不早朝 細 長恨歌
朝餉 …朝餉の… 女房 御膳
大床子の御膳

しらでとおぼしいづるにも猶朝まつりごと
はをこたらせ給ひぬべかめりものなどもきこ
しめさずあさがれひのけしきばかりふれさ
せ給ひて大床子の御ものなどはいとはるかに
おぼしめされたれば はいぜんにさぶらふかぎり
は心ぐるしき御けしきを見奉りなげく
すべてちかうさぶらふかぎりは男女

大床子の御とそへあり机を二つそへてもとふ御膳とこゆるなり 孟御膳をおものと
よむ又つねの御膳なり大床子をさるそもふまうく日の御膳に是
も 細 御膳れいハ女房の陪膳大床子ハ殿上人の陪膳といへれども御殿してれぬとき
ハ御すまふれうり 孟鎖のうすハ八二四陪なりけれんてんくうり
いまはさうく世のまつりの
更衣はそての世よハ尼をを
ふしあひ今らせうふての
後よハ又うくのまくとく
あいくしきき 新ハ退く
孟こえくあさき死ありいへえ
どの又巻通るうく
人のまうしのふあし
河陽貴妃うせて玄宗位を
さりあひしるけくぞもと
さへうあやかうしまさえん
きうんと欲るうく 孟細月
ざめき 私語長恨 耳言 萬歎
月日へてわか宮 お 源氏君服
服の日数をて参内し 或称
称名院説 源氏の素乃
とし服をて参内せらく私
云三年の喪なれハさやうに
とおりへなれとも只月日へて
とおやしまうとらうもおかしき

女いとつかりなきわさふれといひめちをなく
なげくさるべきにもふりこそいへかんしすめしき
めでたしの人れそしつきうしくとぞしはなく
うし世のうわもこれ御とよふれうらしたま
じぶうまとてらしなくせしまひいまえん
さうく世乃なかのしらどとゆ用しもそてろ
やうまなりゆくいひとあいくまさわざな
つもとりのみうどのふあしまくあさいてさ
めきなけきこもり月日を重てわか宮まいり
あねいとゞこの世のものならずきよらにおよ

防さるゝりり給 細 朱雀
院の御をりく醍醐の御代よ
八東宮文彦太子薨の後
そ子君のれ王立坊又早世
そのゝち朱雀院立坊也
ひきこち飯りく 朱雀
院よ越て源氏を坊よせ
よりうちあしらる 源氏不成
ゆうろとらへき
よこ叡人かきとし 源氏立坊
まくおやうく
のかさとよらひてうしめそく
源氏の御らあやうく危さ
るうなりそへしとそとく
さはりありしれと
晴 更衣八窮きてそまつせ
とも明義よまり色たえし
まんるり 擬給の事く
なゆとそ 源祖母之前よこ
ゞのうんへきはうでも通
あつ八命まうくとしそとひ
会せわかどのうまひしを
祖母の御次なくてりしよあ
よ源氏立坊の後りやとれ

もうけのきみにも 孟うちつきさへし ゆゝしう
おぼされどなかなかあやうくおぼしはゞかりて(弘徽殿の女御)
いとおしきこと おぼしもらぬわざのみもち
しろくもべき人もなくまた世のうけ
ひくまじきことなれば中々あやうく
おぼしはゞかりて色にもいださせ給はず
なりぬるをさばかりおぼしたれど
かぎりこそありけれと世の人もきこえ
とれにこゝろおちるまぬものゝぼくい
なぐさむかたなくおぼししづみてお
はしまうちに黄泉をいそぎてゆくぞねがひ
給ひしかつるにうせ給ひぬるにこれ
あはれにやすからずおもほしなげく

定りしも坊ハ…
なくなく
みこむつになり給　細　源氏の君六歳にて祖母君におくれ給ふ時ハ何の心もなかりしに此度ハ思ひしりて愁傷あるなり
ふみはじめ　孟　御読書始　世源氏の読書始なるべく
おそろしきまで　河　皇子七歳御書始例。村上天皇親王時　兼平二年二月十二日一條院　寛和二年十二月八日。花鳥　御書始ニハ御註孝經　玄宗注也　或貞觀政要などもよむなり。御博士讀て云御註孝經序五字をよませ申也。皇太子親王の書始の称なり
子どもわらへ
あまりおそろしき

かなしびおぼす事かぎりなし。みこむつ
よなり給としなれど、この度ハおぼししり
て恋なき給ふ。年比なれむつびきこえ
給へるを見すてたてまつりおくかなしび
をなんかへすがへすのたまひける。今ハうちに
のみさぶらひ給ふ。七つになり給へバ、ふみはじめなどせさせ
給ひて、世にしらずさとうかしこくおはすれバ
あまりおそろしきまで御覧ず。今
ハたれもたれもえにくみ給はじ。母君
なくてだにらうたうし給へとて、弘徽殿などにも
わたらせ給ふ御ともにハ、やがてみすの
うちにいれたてまつり給ふ。いみじき物のふ

あたかたきの…
母君なくてだに　細　母更衣
衣の存生ならねハ人々の妬…
弘徽殿とのゐ所…
又自余の女御たちも…
女御更衣達も光君…
…弘徽殿なとへ…
光君の…聰明なり
…相人

河　仇　敵
あたかたきなりとも、見てハうちゑまれぬ
べきさまのし給へれバ、えさしはなち
給はず。女御子たちふたところ、この御はらにおはし
ませど、なずらひ給ふべきだにぞなかり
ける。御かたがたもかくれ給はず、今よりなま
めかしうはづかしげにおはすれバ、いとをかし
ううちとけぬあそびぐさに、たれもたれも
思ひきこえ給へり。わざとの御学問ハ
さるものにて、ことふえのねにも雲井をひゞかし
すべていひつゞけバことごとしう、うたてぞ
なりぬべき人の御さまなりける。そのころ
こまうどのまゐれるがなかに、かしこき相人

らしめハ　河ニ応神天皇廿
八年ニ高麗王遣使朝貢ス
そのころのれいなり
奥入　寛平遺誡ニ外蕃之人
必可召見者在簾中見之
不可直対耳　花　寛平
の御誡に必可召見者之
きたへる也　必の字のないにあれ
でたきやうなるさきの事を
そのくらゐをよせてハめき
かまへこそうしろやすくしはべる
鴻臚館　抄　日本の玄蕃寮
池　河　職員令云玄蕃寮ハ治部省ニ
客辞見讌饗送迎及在京
夷狄監当館舎事　謂鴻臚
官也　師　高麗人の来朝をとゞ
めらる所なく七条朱雀にあり
ける也　細　今の四塚といふ所
のこしとあり　漢書鴻臚註
鴻ハ声也臚ハ伝也伝声ヲ
賛道也云々　花ニ鴻臚館
とつくりとめる異国
人来朝の時通事とらはせ
ところ也

人の相をとりて吉凶をいふ人　みありけるをきこしめして宮のうちに　禁中也
めさんことハうだのみかどの御いましめあれ
ば、いみじうしのびてこのみこを　源氏之　鴻臚館に　こうろくわん
つかはしたり。御うしろみだちてつかうまつる　源氏の後見めきてつかうまつる人
右大弁のこのやうにおもはせて　将て　源氏
ゐてたてまつるに、さう人おどろきてあま　と読り
たゝびかたぶきあやしぶ。くにのおやとなりて、帝王の　首をかたぶきあやしむ也
かみなきくらゐにのぼるべきさうおはします
人の、そなたにてみれば、みだれうれふる　帝王の方にてみれバ乱あらんかとの心也
ことやあらん。おほやけのかためとなりて、天下を　公方のかためとなる也　花　摂政関白等の補佐となる也
たすくるかたにてみれば、又そのさうたがふべし　相違あり
といふ。べんもいとざえかしこきはかせにて　博士弘文の人と云也

つかさなく　孟　鴻臚館ハ玄蕃寮にあり。仍此寮ノ頭を鴻臚卿と号ス　河　玄蕃ハ玄ハ
蕃ハ藩也。遠藩より来朝の客を接する所也　花　玄蕃寮とハ法師まらうどの沙汰
めり。玄ハ僧也。蕃ハ客也。僧尼玄とのハ昔百済国より来朝せし故ま玄蕃寮つ
右大弁　抄　此弁しられども見えて次　細　このみ也源氏を相人に右大弁の子なりてゐてまいれ
相人おどろきて　抄　右大弁の子と云ども其不審あるく、称名院殿の御説也とぞ
師　源氏を見まゐらせて、かく人のしれと思ひて不審しかりつかれし
このけやしきなりて　河　三代実録ニ仁明嘉祥二年渤海客来孝天皇の親王ともてなして
思ひとどまりて必天位にのほるへき人としられたる也。師　国の親ハ国民の親と云
書洪範云、日天子作民父母以為天下王云々。註云、曰者民之辞也。謂之父母者指其恩育而
言、親之之意。謂之王者指其君長而言、尊之之意。又詩小雅楽只君子民之父母
ことられけるにや　孟　河　西宮の左大臣行幸の供奉しあるを伴別当廉平といふ相人
見て容貌人にすぐれたまへり、いまことくにこそとおもひしきろしきよくおぼえて帝
位あれどなるかくハ謫所のなりしきことなしといひける。高麗人の相するも、光源氏を称す
るなるやあるんとするにおいてなる
その一のうしろみ人とすべし　晩　首をかたぶきめでけりまでハさういふれハ立ちかへ
るをあるひやや或抄に人のこころ帝よぶらむ侍たる国の款となりて太上天皇になりる号よの
あらむも、日本しめより帝王のくらゐにのぼるべき位よのかたくのぶらるれらるを中やわら
補佐の人にてもおはしますハそのことをれハうたがひてしるべしとおもしさまるを
しる相を帝とて源氏よきかしさまりければいかにこころしも　花　源氏の評判されるいふうしふ
かくて、花こ細やうのさてめとなりけるべきおほかた、これハ源氏に太上天皇の尊号をかうむるを
わふと云てより　箋　正義云源氏其生天位よのがるべきおほかたにて、きれいにつくのなくて
必をかさねをおやまるへし、さりけり時に人臣よくなりて国家の補佐として吉なる人をさ
とろく又臣下にもあらすて、まつしき人也とまうして後にハ太上天皇の尊号とえてのち人ハ天やま
みとみかもえてされたへしとく。此一段を花鳥の説不然。宗祇説ハ天下補佐の人臣と

かくれなきこれを事わりねへしとあるも非への字お逸ちりとらく師説よる
まへしとあると又曉不に浄飯王の太子誕生の時阿私多仙人相し奉りて語其相似セ孟瑞
應經云阿夷既相尋白王言敢賀大王生此神人汝我相法太子在家當爲轉輪聖王王四天
下若不樂在家當爲自然佛度脱万姓矣
弁をいとさへりしこと　河柾仮　一説に　荘子　曉に　右大弁とあり
ようし一經にはくらく細流にハ尤の字ふへしとあり　師説濁てよむへし
さいをきつかうき
高麗人ゝ詩の句ゐへと也
筏の説よりかへり
かくれのこともと
細　此進物梅か枝の巻にあり
説あり　曉曰

ていひかはしたることどもなんいと興ありける　奥
詩賦
文などつくりかはしてけふあすかへりさりなんとするに
かくありがたき人に対面したるよろこび
かへりてはかなしかるべき心ばへを
おもしろくつくりたるに
みこもいとあはれなる句をつくり給へるを　詩也　句
かぎりなうめでたてまつりて　河感　日本紀　師　高麗人の感
いみじきおくりものどもをさゝげたてまつる
おほやけよりもおほくの物たまはす　弘
おのづからことひろごりてもらさせ給は

いかなることにか
おぼしうたがひのあるなり
どそ今のうたがひのあるなり
へー
やまとさう
こゝろにやまし　課　和國の相人
むかしく
河　和國相也　藤原仲直か
光孝天皇を相しまつる　高麗
平カ高明公を相まゐらせしハ悪
やまとさう　孟同
無品親王の外戚のよせな
きふくハよろしからさし
孟　親王そてハ外戚より後
人なけれハさうらひぬへき
やかてのんく　花　親王ハ
一品より四品まてハ有品
無品とあるをいふ品とハ
位と無品といふ　童訴
の時親王宣下あるハ必無品
なり　更源氏ハまた元服し
たまハされハて無品親
王とハのたまハ又親王に臣
下ハ天位よりけなきか

ねど春宮のおほぢおとゞなど
いかなることにかとおぼしうたがひてなんありける
みかどかしこき御心にやまとさうをおほせて　試みの心也
おぼしよりにけるすぢなればいまゝでこの　帝王とならせ給ふべき
きみをみこにもなさせ給はざりけるを　源氏を親王となし
さう人はまことにかしこかりけりとおぼして　相人の申せしよし帝の御心と一つなれハ
むほんの親王の外戚のよせなきにては
たゞよはさじわが御世もいとさだめなき　臣下にて
をたゞ人にておほやけの御うしろみを　政を輔佐の臣にて
するなんゆくさきもたのもしげなめる
ことゝおぼしさだめていよいよみちみちのさえを
ならはさせ給ふきはことにかしこくてたゞ人に

なりたまはまほしくおぼしあはせては君とは親王となりぬる世の一のことには
のみこなるを世にめでたしとたのもしけの君とよつぎて源氏の君とは外戚のよせ
なくてはたゞよはさじとおぼすよしなり
くせうきこいて無品の外戚の事也 聞書細曰義
きこん 允仁 日本紀 無品 親仁 古名保撫物語
道々のざえ 細 才とはみえしめのまわざしの学問なし。おりゐてよくとゝのへまなり
天下をとるべき人は博学す そいたらぬ学 行不如無燭夜行 人不学不知道
とよめり 細曰 主上は広く学文の義は天下をてらしし明鏡にたとへ給へる文
ただ人にはいとあたらしけれど 惜
なり 眼とぞ見えぬべし
すくえうのかしこき道 孟 宿曜
宿曜は星のみちなり 宿曜師
師 昔は二の道なり 廿八宿九
曜の行度をうらなひて人の運
命を勘へやる
源氏になしたてまつる
源の姓は嵯峨天皇の御時
はじまれり文徳天皇の
皇子高明公より後は
源氏の姓を給ふ光君も
例なりと河海にあり
なぐさむやと 更衣のうせ
たまひしかなしみを慰め給ふ人々

はいとあたらしけれど みこと(親王)なり給ひなば
世のうたがひおひ給ひぬべくものし給へば すく(宿曜師也)
えうのかしこきみちの人にかうがへさせ給ふにも
おなじさまに申せば源氏になしたてまつる
べくおぼしおきてたり 年月にそへて
みやす所の御事をおぼしわするゝをりなし
なぐさむやとさるべき人々まゐらせたまへど

なずらひにおぼさるゝだにいとかたき世かなとうとまし
うのみよろづにおぼしなりぬるに先帝(せんだい)の四の
宮の御かたちすぐれたまへるきこえたかく
おはします母きさき世になくかしづき
きこえたまふをうへにさぶらふ典侍は先帝(せんだい)の
御時の人にてかの宮にもしたしうまゐりなれ
たりければいはけなくおはしましゝ時より
見たてまつりいまもほの見たてまつりてうせ給
ひにしみやす所の御かたちににたまへる人を三代(こまだい)の
宮づかへにつたはりぬるにえ見たてまつり
つけぬをきさいの宮のひめ宮こそいとようお
ぼえておひいでさせたまへりけれありがたき

先帝 細 系図にもしるされず 河海には光孝天皇と見えたり
しかし皇女為子内親王は
延喜の女御 兼香殿など
あれど当流不用と師説なり
三代のみやづかへに
細 河海 光孝宇多醍醐なり
とありしかどもさうにて三代
とみえすくも見ゆべしと
いへるなり 哢同

ゆゑつくりゆやとと　篁　前よ
いとよりし桐壺衣に此ケ
えてとおろそ法門の御ん
まさることよそぞらなりけり
ともにまりて源氏
傳らせし更衣とぞ
めで給ひけるかれ
なり
あらはそうおすく
ゆへといちな斗く　折　これ
ように更衣を好みてむ
くるしのへるとく
みかくしきりける
四ぞ入内乃事を意ふも
かうしもちろみ
傳せうその名なし
細　若上の更衣より後予
新口なり
うくふかそくて
前よ心かそきこ海にそ
みちりまてくあるとう
あそしえし

くらし人まよはんとそうしもろよゆゑつくりや
しれらろとまりてねんしんりうそて
とれうろうとほりて源氏しろみ也そうやま
まほせきもらはしそうれあるみ物そうしや更衣
ゑあの女房乃いとうそうくそでまりつかの更衣
のあらしうまそろくりそおきれしためしを
ゆうしうと物かりつてそすらくえもうこ物や
しうぶりけつかしるよこうそもうせまゐ
心得そえさ海あきくおりしまへすまよでわが女
ゑそまうとあおしつくまむひ世かしん此そ
いと詠んしろよきてしさせし前みさつる御
人くれうてこうろ此せうとの歎ア乃
みそたじうくらかそくてかりしまさんより

かくつが　飛鳥井雅中
五倫のひとつなり
同義懸於子木但非上古
此木歌　建暦御記
おまれくら　前よまき
いの家のひめやそていと
ようゆるしてゆひのそをせ
まりまれとえしとそ
きにとそり
これ人の御さいまそりて
細桐壺更衣八族姓まもう
ことまりて人をとねらま
是八族姓人くく人のそね
こいふへき方あるにし
けそりて　前諸兼謫
えぞうろもかれとそ
られしくえる輝之
こよるう　登越　奥入
前後のみえ須なり
ましてきおくまうせ
前よは清らくもうれ給
とゆとあり人への女房
白氏家第一と源氏まうし
おもうみせかせ遊所あう

くらすしをすせませて御心をしかくさむ
べくゆかりかりてまつりとそてまうら給
つららつかとくてつむけるれうらちなり
さ海あやまちきまでそ物語人あへるられい
人の御さいまそりて色向るしめぞまゝく
人もえ物しうしめゆめしおりねぼけむら
てあるぬるみしうれ人をゆるしきうこく
ぶきしるは心さしあやみとなるもしぞの
しゆかりしまさうそは　かそれどのつく
御ひうけろひてこてしるく物語したくぎら
やしなうとあくれなりわざならきちら源
氏の君たしはあうさうかあくねとおもして

此方ハまてとらあへあ
も涙とくて 若君さらへし
くら給ふるび 孟 女御なきの
神とうびまつる事に若君
ハあなりしまれまり 細日
ありみなそすまろ
くれまんとそのくひて
に漏さるなり
えくるやもと而ハ
細 源氏ハ君之衣の西親
ハ多くへあらねども又内裏
のまけの孫すふに浮名
てなくらしらぬひすゝて
る唐さい 孟 昵近 なれ
むつぶるなり
えもくさゝりむとめ
細 主上の御心ハ源氏と
も若君をもいられまた
御よおひあふねせ 師説是
あやしくこまゝへ
若君を大切に思ひめして
の御かハかハ若君はえて
私 いかなりハハかなれをもやしく
此源氏ハ若君に

もげくくて世語れたりけれはえちちあへ給ひ
いづれのれうとも見れ人にもまもらんとお
ぼいたりやいかゞくまいとめでたくされ
とうられしうびまつるにいとまうちら
うし若みくをちまうくれてへども我なら
りうらそしまらうらこゝやも而ハかげうう
我らしあそぬきむしうくまてちこ内侍
のまけのさてしきなさらつされならいと
あそれとまりひきてしあそてつひまうら
まわらうはざひきそしまわらむやと源氏
え涙さへもつきとるるきこれせひらあてこ
うしとのひそしあやもくしまんこらしたへ

きこらなんなかおかしと御めさぞうつたへ
おすへつきまさまみなさいとうつる
しゆへうひてみてきもまけるうしひかへ
なし恋てつけるまへよハたえさうしてらすそと
くらうさ花りみちようけうしも御さまきこ
えさしまひらうこままうたのまへ
きばこさでんの女はまうこれなる
そばしくさゆへうちそへてもいらのめく
さもすちつぞ御しとわかしてせまえて
ひそしうそてまうりまひ君 うらおも
まのはうさうちみもおすまいり くさはさまへ
ん(?)うへすくりく若かる御世のひとこ御

細 更衣の腹ハ源氏を思ひ
弘徽殿の

光る君よ源氏の御名をひかる君ときこゆ
ひかる君　河　亭子院第四の皇子敦慶親王号玉光宮好色無双之美人也又光孝天皇の御子
式部卿是忠親王の御子八源氏なり光源中納言と云又仁明天皇の御子西三条の右大臣をも光る君といふ
云又日蔵の系図にも光る君と云左大臣も明らかに源氏とかゝれしと下にみえたり
かゝる目のうへや　花　一宝
院の御時上東門院の御入内
のころ左衛門督よりぞく
うたて(?)　宏羞(?)と世の人が伯
にも蔭(?)雲の女院同殿にて
ありしに(?)八目の事を
と御代の事を(?)
きこえたる八此物語の
かたりたる事ならずや
紫花物語にもあり
歳つもりしこと
十二にて御元服　河　人生れて
十二を一周として此歳冠礼
ある和漢の例也　礼記曰天
子之子十二而冠云々
ゐたちおぼしいとなみて　抄　一世の
源氏の元服の儀式八定まりたる
ことなれば殊更に念入させ給ふなり(?)
あるはのきゝ(?)　抄　小山(?)抄云
かぎり饗膳之事　玉(?)卿

君(源氏)の御わらはすがたいとかへまうくおぼせど十
らぐくなれべうやくひのえめし(?)
の御わらはすがた(の童形を)いとかへまうくおぼせど十
二にて御元服(げんぶく)し給ふ居起(ゐたち)おぼしいとなみて(奥入　居起世　立つ居つ)
かぎりあることにことをそへさせ給ふひと
とせの春宮の御元服(げんぶく)南殿(なでん)(紫宸殿之)にてありしぎ
しきのよそほしかりし御ひびきにおとさせ給はず
所々のきやう(饗)などくらづかさこくさう院
などおほやけごとにつかうまつれる
なりしもぞととりわき御ほせごとありて

饗女房　別納　殿上　蔵人所　侍亮諸大夫　二百膳　穀倉院屯食　手具　饗別納　分見具　以上應和例也
くらづかさ　抄　内蔵寮ハ近衛南堀川西猪熊にあり
こくさう院　抄　穀倉院ハ二条南朱雀西にあり八五畿内諸国の錢並それ徳田役官などの
稲などを納る年中の饗膳をもつかさどる
おほやけごとに　東宮の御元服にハ大将まで参入ありしや世を源氏の元服にハ参入ありし
の役事ありしとなり
おはします殿　抄　清涼殿也
中殿ともいふ天子のつね
しまさ所をいふなり
ひんがし清涼殿にての元服八
一世の源氏なれども天皇
太子に八紫宸殿なり
いし　花　椅子也今案
親王の元服の時八晝御座を
撤して大床子二脚をたて出
御ありて源氏の元服に八殿
上の御倚子をうつさるゝなり
ども小朝拜などの時八六
位蔵人二人殿上の御倚子
をとりて是をたつるなり
ひきいれのおとゞ　花　日録
をきせそむる人なり
かうぶりを引入る故なり
中ごろ八葵の上の父左大臣之

きよらをつくしてつかうまつれりおはし
ます殿(でん)のひんがしのひさしひんがしむきに
いし(太子の御座を)たてゝくわんざ(冠者)のおまし(源氏の元服する座)ひきいれの
おとゞの御座(ござ)御前(おまへ)にありさるの時にて源氏まゐり
給ふみづらゆひ給へるつらつきかほのにほ
ひさまかへ給はんことをしげなり大蔵卿(おほくらきやう)くら人
つかうまつるいときよらなる御ぐし(髪)をそぐほど
心ぐるしげなるを上はみやすどころのみ
ましかばとおぼしいづるにたへがたきを心づよく

延喜七年二月十六日當代源氏二人元服の次第とうしてうきり奥入に委あり
称名院殿仰云盛明親王天慶三年三月十五日申時於綾綺殿の東廂ヲ
ての前にはみそて元服とくらふ此御例説の事をも委くさしたもとさく
みづからゆひ給へる
河瑕郎 称名院仰云わらハ御装束の時総角しくらつゆのの之師之服
以下元服ハ童形にて鬟ゆひてまゐる 花
大臣つかうまつる 後徳者らへとてもなの例とのとまうて此十を云くらのしく
あれハ理髪の人とつふとゆるらて太臣てのらる人ハ此人次の太臣てもとえらく師殿
人次をそ大臣でおいてらる人なり則理髪する人也
うらうのしつひ御やかえと而
冠者のやすとを而へ 元康保
二年八月御記ニ下侍東
第一間旋立屏風其中敷
土鋪二枚菅円座一枚 今案
一世源氏元服ふも下侍にて
とりて御所ちとそ西宮抄に
見えたり 御下侍とハ殿上の
次をえふなり
の附ハ赤色の闕腋の袍を
看をて殿上童ふも赤色也
元服のくらゐハ源氏の君ハ
位ろれハ縫腋の黄袍なる
へし 元服今ニ無位ハ黄袍

ねんじくんさせ給ふうかりしにておやどもみ
所よまうでまそてこそ いつくへてこれ
つまそそもしまりのちを御よろこはれ人かうそこそれ
とし給ひみひさらにまし（て）えあのひあ人あさ
すめばしまさあくおりもありつかとひし
のこしとろうくしとれしくひ給りろうかとうら
きびさるつかとへおぎとどうらやしりしこうへ
しく給かれつつえかきむろうへ川くお

その日ろ後よ海よりこるの人ろうて...
の東庭ふて御前よ向ひてあり 細長の御元服ハ南殿ふて堂上
下ふくあうゆへよ宮川 ...
え去のひあへすで 御前よ何へし...
むつしのちょうりてえし
きびて
文家の
あげまそうりや
ゆさうれの御年...
天壺の皇ろ母ハ桐壺の帝の
いうとくもろうしてみてかう
そりわれ…
源氏も...
そくれ...
ゆくゐ...
あし...
葵上をまいうさせ給あれ
ゆへよ御...
御給も御...

河瑕 日本紀
あおそうりやせんとて元服
さそひあうりちんされの大臣のみたこもうよ
ねけしきありとおぼしわうれふこたあれもつろハ
この君ようてまつるんの御なかりけらへいち
をい奉しすら給へ...
よまうでまそて給へて御酒

一左大臣より源氏へ葵上をまゐらせんとせし事帝もうちうちゆるされけるとぞ
そひぶし 河 摂政記 延長十二年十月廿二月保明親王元服夜故左大臣時平ノ女参入俗謂
副臥 李部王記
さうらひにまかでゝ 孫 花鳥院殿御説云殿上にて御盃給はるべし源氏元服の御さまは給ふ
の御倚子にはあらで御盃をかはりて西宮記にみえたり 抄 さうらひにまうでさふらふ
事の御まかりと申されば殿上にて御盃酒なるゆへにまかりさふらふべきかといはれ又云
は此時御殿へめされて御盃たまはりまつるべし
みこたちの御座のまゝに源氏つきたまへる
の次第に着座のよし 西宮抄
まあり
抄 かくしてかへさせまゐらせ給ふ
細 今ひきいれの大臣舞有
ともすみやかにてまかでさせ給ふ五十日の
の事をしられなかりけるとぞ 葵上の
文抄として 私蔵説 元服乃
のちは臣下の列なれは三宮の
上まで着座のこと 内侍の
さるまじきの事は 西宮抄の
みこたちの西宮抄のみやむ
るは後作 親王の座の次第
またあらはれ 式部卿宮もさて
のちしかるべきといへり
や細流の説によるべし

どみこたちの御座のすゑに源氏つきたまへり
左大臣 抄 けしきばみきこえ給ふことあれど もの〳〵つゝ
　書頭あり
源氏元服のよる 左大臣のむすめ参るべきよし給はりしを
ましきほどにて ともかくもあへしらひ
源氏の心にも御かうぶりの事にて かへしも申さぬ也
まへより 抄 内侍宣旨うけたまはり
孟津 書表の内侍にて 内侍は宮の宣旨也
つたへて 抄 おとゞまゐり給ふべき
書抄 女房の内侍まで 御簾の外をたまはりて八殿上へ
給ふ 抄 御ろくの物 うへの命婦とりて給ふ
さきにめしありて まゐり
きおほうちきに御ぞひとくだり れいの
かはらけのついでに

内侍宣旨うけたまはりつたへて 孟 内侍宣旨のうけ給はりつたへて 内侍宣旨のつかさ
養 引入の大臣も殿上の盃酒の座につきけるを御前の一献にめして内侍宣旨ち
まへ御前よりといふを孫 女房のつかさにとて
よ河海に内侍宣旨を内侍宣旨といふる女房の中に内侍よりもつかさどる
て孫 女房の内侍の奉書を命婦とりて出したまふ故に内侍のつかさどるを見て
けなくの物を給ふ 抄 禄の物を 勅禄のものは命婦とりて御手へつたへ給ふ
ぬかれぬる 禁中まつりことにはなれは
まつりのなかにも 花 白大袿に女房のきぬ一領そへて加冠の禄
ありける御袿八女房のきぬいろなかりし 晴 御袿は衣のうへにきるものといふ
ひとくさのありき
抄 加冠の人に給ふ物をたまはりてきる
そは元服の時々の禄なり 細 いときなきはつもとゆひのつとめなり 河 繡
めでたく大臣の婿となるとぞいふ
のちにあく 師 元服の時の
髪を紫のくみにて
てゆふ是はかたくむすびてゆひ
とらへてなからかはらぬ
かしこは葵上をこめて
ひいふるの人はひときびく
めさうらしき 於遺 ゆひて
むすびめかしと結ひのむすび
まだ衣のいろまでもそめて
まさひつらくもかほさき
晴 かくゆひむすびてこそむ

中門 いときなきはつもとゆひにながきよを
ちぎる心はむすびこめつや
作せたり てうどろかさせ給ふ
左大臣 むすびつる心もふかきもとゆひに
こきむらさきの色しあせずは
色のかはらぬといふ心也
とそうしてながはしよりおりてぶたう
盃 舞踏 庭の舞也のやうにて 河 長階
し給ふ ひだりのつかさの御むま
のたまはせくら人どころのたかすゑて給はる

らこれをとるあり 細 紫ハ無してそといふハ今ハ元服すれハあかく青のものハ源氏の君乃ものたかきハ
むらさきなり 抄 今日加冠の人なれハかりしゆひより紫 長かるべきことぶきを結ひこめたるとなり
こころしりてもこれハかりしゆひのいろすれハ源氏の御心ざまにかなひぬべうとよそへ
たまうしよりて 花鳥 清凉殿より南殿へうら小廊く大内の時ハ此所にこそ陽明て東庭より
ゆふて是あらり引入の大臣もおなじく公階より下りて清凉の辰巳のかさにむかひて御おきて拝舞
しなりへし

たのつかさの御馬 花 左馬寮の御馬なり 抄 此所に殊出の牧より引進する御馬をあつかる
蔵人所のたかすへて 花 鷹飼ハ蔵人所の所掌也 近衛府の舎人の才ありぬ人をえらびて鷹飼に補せられ
むかしお羽陸奥より鷹を貢せしも蔵人所より参らる之 明 蔵人所ハ禁中仙洞摂政大臣家にも
あり殿上の次のまにありとへだてて蔵人所となつけ地下の者れ候まてる所く 拾 引入大臣のたくまへ
る鷹わしハかならず蔵人まいるかまへと云る此義歟

みたまふらんぶらめ
昔 源氏の元服ニ倚とする今
ハ東宮の御元服の時の義を
表そめる人き何ハ皆としく
あたなり
こその 河 獻物(ヨミモノ)也或籠物(コモノ)
菓子さも以薬を入れて
落頭をあえて大鏡と入
てあの様式ハ析に付るく大臣
以下これもとり陰にハ勝劣
よ於て調もらして五菓は
柑 橘 栗 柿 梨 花 獻物

抄 清涼殿階に殊也

御はしのもとにみこたちかんだち
めつらねてろくどもしなじなにたまはり給ふ。
その日のおまへのをりびつもの、こものなど右大
細 をりびつハ檜の入をり物也
弁(ずん)なむうけ(ぶん)たまはりてつかうまつらせける。
とんじき、ろくのからひつどもなど、ところせき
屯也食ていう飯をいふ下らの為に強飯を丸めて
まで春宮の御元服のおりにもかずまされり

ゝ中に続(カコ)に入るをハ籠物(コモノ)といふ又折櫃(ヲリビツ)に盛るをもあり。親王元服の時ハ献物あり
王なりハこれをとりて庭中に列立して一世の源氏乃元服にハ献物なきにや。但此物結の引よ
なきはかくることにまとらんへきせあかるみしよれハ一世の源氏の元服なれとも親王の時の例
をとりて献物なとし右大弁うけたまはりて用意ありしや 花 右大
右大弁 抄 右大弁勅仕例(ゴジン) 天慶三年二月十九日源清平
ろくのからひつ 細 禄の辛櫃(カラビツ)ハ禄をいる以下の元服にはこれをしそも東宮の御元服の時にはなき也
其故次の御にも東宮の御元服に下くさまされりと花鳥に見ゆ 孟 禄の唐櫃を例
よありぬれともそのえさせあらんよしもし
きまゐらぬの御里に
元服ニ南庭嫁娶例 花 伝云
十二年十月廿二日保明親
王元服夜故左大臣女廿
をまいらせられ弁に詳ス
義村上第四皇子為平親王
御元服其夜作て為明王の
女と元服の夜参らせられ
いとをさびハ 抄 源の例を王
くくひなくとしるらと
云御く
ゆゝしう 細 此ゆゝしう
ハゆくしきもの
女君ハすこしすぐして
葵上ハ源に四兄世此事の
ましたるやうなれ婚後

なかなかかぎりもなくいかめしうなん。その
夜おとゞ(大大臣)の御さとに源氏の君まかでさせ
婿礼の説也
たまふ。さほふ世にめづらしきまでもてかしづき
きこえ給へり。いときびはにておはしたるを
源氏の幼な心
ゆゝしううつくしとおもひきこえたまへり。女君は
左大臣の心也 葵上十六歳
すこしすぐしたまへるほどにいとわかうおはすれば
源氏十二歳なれハ 葵上の事
にげなくはづかしとおぼいたり。この大臣の
葵上似合ぬさまと 左大臣
御おぼえいとやむごとなきに、母宮

葵上ハ心をとゞめおはしく
ことやくらのひとり
葵上の母ハ桐壺帝妹之
一つ后腹の三宮也
この君さへ　源の事也
かくおはし　右大臣のむすめ
まうけし
右のおとゞ　弘徽殿の父
朱雀院の祖父二条のおとゞ
ぞといふ葵上の父にたいして
此事なり
くら人の少将
何　執政ノ息補ス蔵人少将例
清慎公 実頼 貞信公一男母
宇多院ノ皇女源順子 延喜
十九年正月廿八日任左
近衛権少将ニ延長四年二
月廿五日補蔵人ニ兼去
かしづきたまふ四の君
源氏を右大臣のかしづき給
ふまでとりよそひもてなし
一段右大臣も右大臣の君を
らぬ威勢なりけりと

一つきさいばらになんおはしければいづ
かたにつけてもいとはなやかなるにこの
君さへかくおはしそひぬれば春宮の御(朱雀院也)(おほぢかたへさしていふ)
ぢにてつゐに世中をしり給ふべき右大臣の
御いきほひはものにもあらずおされ
給へり御子どもあまたはら〳〵に(御子ハ太大臣の子達)(をのをの)
ものし給ふ宮の御はらはくら人の少将にて(葵上ノ同母二の兄也)(くら人のせう将ハ中将となる人也)
おかしげなるを右大臣の御なかはいと(右大臣のむすめ弘徽殿)
えみすぐし給はでかしづき給ふ四の君に(蔵人少将が妻)
あはせ給へりおとらずもてかしづき(の妹也)(四の君)
たるはあらまほしき御あはひどもになん源氏の君は(中宮の)
うへのつねにめしまつはせば心やすく

さとずみもえし給はず心のうちにはたゞ(大殿の方へおはせんことをいふ)(源氏ハ)
ふぢつぼの御ありさまをたぐひなしと思ひ
きこえてさやうならん人をこそ見め
にる人なくもおはしけるかな大殿の君
いとをかしげにかしづかれたる人とは
見ゆれど心にもつかずおぼえ給ひて(源の心にかなはず)
をさなきほどの御ひとへ心にかゝりていと
くるしきまでぞおはしけるおとなに(藤つぼのまへなる事なし)
なり給ひてのちはありしやうにみすの(藤壺のかたへ源をいれ給はず)
うちにもいれ給はず御あそびのおり〳〵
ことふえのねにきこえかよひほのか(源の琴笛と聞ゆるを)
なる御こゑをなぐさめにて内ずみのみ

ひとへ心
源の行まりん源ノ藤壺
別ならぬ心なく
ひとりのひとなりけるそ
元　源氏の君十二ニ而元服の
事ありて此頃まで十二
よりのさかりのほどをよくま
せて戸給はり帰本の春を
のそひ十三より十五乃
様まくのことハ
撰すれとも一段よよく給
よ能て給へし

れりふくのんく
禁上よめしつり女房の涼
殿よめしつりべき人なと
なり
ほんよほくべき
弥源のさいくみそしょ
次やうふとなり
寒げいさ　淑景舎　桐
壷のる事　河舎八殿の
次く庶人の家みも寝殿
雑舎といふがごとし
さとの殿八
細 文衣の里之ほかに二条院
といふく　花　業花地経よ
くて大殿十文の文の　盛明親王
まさせおひし二条院を
めらくつくらせ給ひて
いりせりあひと給ひけれ

いつむかう禁中にて
おふ日さかくひくひく、やかいかのよ二三日
かなしさもしくよせまて　さまへどこぞはまいか
かきれさ御身どもつみうらく　おほ殿のほんよこ　だでいと
かなうしつづさ次ちゝらきみ流うさごくの人べく
世の中にもとかへさしぬとえりとくの人
まぐてもてさそしらせよなかの　源のほんくのよしちら給ふ　御れよつく尾
されあきびとしおかるくおしいてさらく　細かんこころまに　盃労　かーつくこ
内ゆくもるのちげいさをはぐりしたて　禁中の源の舎主示よ八しく　源氏のおいまかも宮へ
はうやとずぶの御かさぞくの人ぞ出まそで　文衣之　かしこうきらふ
ちらんぞさふらりせし殿みさとの殿はもて　そてあつく
まししさうくとつさよ宣旨くだり　修理 織 内匠 殿舎を修理せられて　えんじ
でよかしめしあつくらせ給ふと　無二なりおほれも手くしえんれ

んゆくうぶらりほくりこそく
せあ人へい　今条京極真院八二
条京極よおりりくく八二条ノ
院と号せりとか延暦二年法
真院と名をまうれたち
く源氏の住里の二条院八と
まず可准みや
いけの心　池の座世
何擲観題鴉鵲池心浴鳳
凰ヲ白氏文集　鴉鵲八楼の名
也又朗詠ニ苔生石面輕衣
短荷出池心小盖疎
ちりぬとてもうけるやさぜん夜
の花池の心ぞあらんひちかは
躬恒
うら深不よおりふやらるやん
細 大かうさおりふやうとかりら人と
となりつまうさ夜盡のんあり
ひらる君と云名八　細 源氏の名れたりを云朝より西三条の右大臣源の光と云八仁明天皇の
ほよ上人也　師　前よみみかりしさ八さらんふさなうらゝあやかりを世の人ひかり君とさ
こふえも忘りまうてさて八こまつくろ人のつ弟一君とも人の云ふろしとさるく源氏の儀く
つひつへふさうしなん　細 紫式部秋かきうゝるほと人よさうせりしこく何の壷みも此心あり
おさ此頃若よも云かせられ人のるかのまらりの三年よ云なきりしけまりきうとそ二人の云
つらへさうと人のあるまてまりきらと見ありひらのやま一の書うなり

とのおぶらぬのうくぜせんひへおおりしろうき
ところかゆりをいけのあちろろもろくし
なりきくめぐくくいけりかかしおかりうら　源氏の心
ぞまつよおりおやりかりしらん人をえく源の
とめみやとめとどけおかりらしゅほしさ　葵の源の心をひつもとたたる人
おひろおろみつといふ名八にまさうとのめ
でさしえぞてつれまでそてまろりきろもぞ
いひつへさぬとあん
晩日　花　ほあよ八好みのもく　禁ノ一や後よ八二条院よ住ますらと